

架空の『リビング・ルーム』に立ち現れたのは、目をそむけたくなるばかりの、私達の生のリアリティだった。

OM-2 [作品 No.4-リビング-]
3月24日~28日 神楽坂ディブラツ
die prätze M.S.A.collection2006 参加作品



OM-2 撮影/田中英世(2点とも)

柱のそばで女がひとり揺らめく。皿に蠟燭を灯し、と思うと突然手を放し、ガチャン。皿の落ちた鈍い音の衝撃が緊張感を与え、舞台が始った。旅芸人のようなカバンを持った男女が、エロティックな行為

半ばで崩れていく。その背中への貼り紙で、リビングルームを舞台とした寸劇を見せていたことがわかる。舞台奥の引込んだアルコーブから激しく通過する電車の音と光が流れ、女がそこでごめく。痙攣する男、白チョークで言葉を壁や床に書く青年などが入り混ざり、そこに太った男、佐々木敦が登場して、舞台に地割れを起こし始める。

佐々木は奥のテーブルに座り、マイクで語り出す。それは自分がいじめられた経験の陰惨な話。妙な抑揚で聞き取りにくい、そのテキストが壁に投影され、観客は物語に引き込まれる。いじめた男の一人が電車で轢かれた話などを語る佐々木の顔が、前に付けたカメラから背中に背負ったプロジェクターで投影され、重たい雰囲気立ち込める。赤い塗料を顔にグチャグチャ塗り、血まみれの姿で突然椅子を倒し照明を壊すなど、暴力的な雰囲気が出てくる。

「作品 No.2」で巨大なバルーンの中で消火器を噴

霧し、「No.3」ではゴミ箱の中のカメラで自分を写しつつ、語り身もだえた佐々木敦。そのコンプレックスがリアルに迫ってくる。これは観客だれしもが持つ、それぞれのコンプレックスを刺激してやまない。いじめ、虐げた者と虐げられた者の思いは、こういう場に溶けていくのかもしれない。架空かもしれない物語だが、その自己暴露的、私小説的心情吐露が強いリアリティをもたらす。

これに対し、舞台上でシルクハットに黒のフォーマルな男二人が、体を斜めに傾けて立つ姿は、マグリットかデルヴォーの人物にも見え、正のバランスを崩す象徴のように機能している。さらに青年たちが身もたえ、一人は全裸になって振れていく。ノーマルな感じで、崩れていくことがうまくはないが、それがいい。彼や黒服たちは劇団自動焦点の役者らしい。タイトで抽象的、マイムのような雰囲気も持つ劇団が絡んだことで、OM-2の「異物感」が見事に浮かび上がった。

今回の舞台は、自動焦点の脚本・演出家佐々木治巳のテキストと、佐々木敦の書いたテキストに、OM-2の真壁茂夫が手を入れながらつくりあげたという。壁や床に書かれるアフォリズムといえる抽象的な言葉、寓話のような動物話と私的ないじめ話がつながっていく。二人の佐々木の抽象とリアル、最も両極のテキストが混在し、そのコントラストが美しい。これまでのOM-2の作品に比べるとわかりやすくシンプルだ。テキストを示すと通常「読み」は限定されるが、この舞台では、混在するテキストが読みの範囲を広げた。作品タイトルも抽象的だが、抽象とリアルのせめぎ合いが惹きつける。

同じフェスティバル、「MISAコレクション」では岸井大輔、木室陽一らによる「(-) 2LDK」が上演された(麻布ディブラツ、4月5日)。これは観客席も舞台も通路にして、2LDK的な部屋で展開される日常が、あちこちで同時に繰り広げられ、観客が見て回るという趣向だった。またドイツのヤン・ブッシュの「マッチ」は(世

田谷パブリックシアター、4月8日)、男女の愛の争いをダンスで描く作品だが、これも2LDKほどの空間で映像を多用して展開するものだった。この2つはあくまで人間の日常を舞台空間に置くことで、非日常化しようとしていたが、OM-2の「リビング」は、日常のなかにある非日常を露呈させる。いじめが日常となった男、痙攣する男たち、電車で轢かれるイメージなどが、次々とリビングルームに立ち現れる。

リビングという言葉は、普通はリビングルームの略語として使われるが、この舞台ではliving、「生きている」という意味が重ねられているのだろう。いじめられることの告白で生き続ける佐々木は、僕らのなかのいじめの構造を露呈するが、同様に、全裸になり痙攣する男は、演じ舞台に立つこと自体を露わにし、文字を書き続けて壊れていく男は、脚本を書く人間の歪みを呈しているのかもしれない。まさにリビング、生きていることのリアリティといえるだろう。それを支えているのが、佐々木敦の存在だ。演じられる日常ではなく、架空の話としても、強烈かつリアルに迫ってくる。OM-2の芝居では、当たりさわりのいい日常ではなく、日常のなかに潜む混沌、生きることの困難とリアリティが激しく観客にぶつかる。それが苦痛である人もいよう。しかし、このリアリティを回避することは、僕たちの本当の日常、そして生きること(リビング)自体に目をつぶることのような気がする。(志賀信夫/舞踊批評)



●OM-2:真壁茂夫を中心に87年に結成。以来、パフォーマーの身体表現や、テキスト、映像等を複合させた前衛的で実験的な作品を次々と発表。現代社会、あるいはそこに生きる人間像を過激な表現で映しとり、日本の演劇シーンに驚きと衝撃を与え続けて来た。ポルドー、NY、フルジャワ等、国際フェスティバルに数多く招聘される。11月にはインドネシア、韓国公演、来年2月『ハムレットマシーン』東京公演を予定している。

客席と舞台、バグダットと渋谷。二つの世界の距離を無化する、独創的な「語り」の手法に拍手。

チェルフィッチュ [三月の3日間]
3月11日~21日 六本木 Super Deluxe

六本木のクラブ、スーパーデラックスに、舞台を三方から取り囲むようにゆったりした空間が作ってあった。

台詞のノリにあわせて体を微妙にくねらせる、あるいは、バケツで水を組むような、変な動きを続けながら俳優が観客のとても近い位置で語り続ける、そういうチェルフィッチュスタイルの作品。どこか奇妙でユーモラスでもある。

語られるのは2003年アメリカがイラク攻撃を開始した日から3、4日の、反戦デモも通りすぎる渋谷公園通り、丸山町界隈のちょっとした出来事である。それは客のほとんどいないミニシアターで出会いラブホテルで4日間を過ごしてしまった男女のこと、はじめてデモについて歩いた男二人とか、ようするに渋谷でプラプラと時を過ごしていたら、6名の男女の体験なのである。とても魅力的なのは、彼らの息づかいがあまりにも



チェルフィッチュ 撮影/横田 徹

自然で、渋谷をプラプラする若者のそれになっていることだろう。会場にはその自然な雰囲気を楽しむ演者と観客が一体になった静かで温かい空気生まれていった。

私は演劇の可能性は二つの方向に開かれていると常々考えている。一つは客席つまり観客との関係、もう一つは語りということだ。チェルフィッチュの俳優たちは、観客との理想的とも言える近さにおいて、街角の出来事を客観的に批評的に語るという方法を堂々と編み出して来たのだ。なんと勇敢な連中なのだろう。しかし、このスーパーデラックスという会場のせいかもしれないが、この作品で想定されている観客は、あまりにも(おそらく他の作品よりもずっと)出演者に近い同世代の人間たちではないだろうか。もしそうだとすれば、もっと広く茫漠とした観客の地平に向かって新たな歩み方を探る日が来るのだろうか。

マルチェロ・マストロヤニとソフィア・ローレンが、ムツ

リーニの人場するローマのアパートの一室で表の喧騒とは無関係のごとくに、途い引きを展開する「特別な一日」という映画を思い出した。「三月の5日間」という作品でも人物達ははるかなイラク攻撃とは無縁のように過ごしているが、そこには世界が戦争の時代へと進んでいく遠い足音のようなものがかすかに響いている。

問題はその距離、バグダットと渋谷の距離七千キロなのだろうか。そうではなく、ローレンとマストロヤニのいる部屋の壁一枚向こうにはファシズムの怒号が吹き荒れているように、じつは距離は問題ではないのである。あの三月、渋谷とバグダットも壁一枚隣であった筈だ、と舞台は主張していた。そして2006年の現在、アメリカ軍の極東戦略再編のために日本が支払うのが千兆円に達するとも言われはじめたこの日々にあって、それはなおさらのことである。(井上二郎)

●チェルフィッチュ:作・演出の岡田利規を中心に結成された演劇ユニット。「超リアル日本語」と称されるならならとした捉えどころのない台詞まわしと、発話の際の身振りを誇張したかのような独特の身体所作を用いた作風で、演劇のみならずダンスの世界からも高く評価されている。『三月の5日間』は第49回岸田戯曲賞を受賞。12月には新国立劇場で新作が上演される。

舞踏の「粹」から抜け出せ！まだ見ぬ世界へ、舞踏家たちの挑戦が始まった。

NUDE [部屋]
4月11日～12日 神楽坂ディアラツ
die prätze M.S.A.collection 2006 参加作品

NUDE「部屋」観覧後、口をついで出てきたのは「淡々と日々は流れ、淡々と何することもなく部屋にいる。やることはいくらでもある。観るものもいくらでもあるが、そのどれにも引っかけを見出せず部屋にいる」という言葉だった。NUDEのメンバーの一人である金野泰史と私は、舞踏家・元藤燐子¹⁾のワークショップ生で同期であり、岡本太郎美術館での舞踏パフォーマンスで共演した私たちは、激しく師や天や地に長い竹を突き立てた。その数ヶ月後のあるイベントで、目黒大路氏とNUDEを旗揚げたことを伝えられた。彼の眼は遠くを見据え、決意を新たに舞踏の深奥へと踏み出していく姿を見、興奮しながら頷いたことを覚えている。そして、私も元藤の何某かのものを越えていこうと、生前の言葉を拡大し、多ジャンルとのコラボレーション、ソロ活動を中心に原爆ドーム、第五福竜丸、NYへと自身を社会の中に投げ込むように活動していた²⁾。その頃、NUDEは舞踏の深奥へ、1回、2回と公演を重ねていた。

第3回公演は「部屋」という題名であった。演出



の目黒が「今一度舞踏の特性について考え、舞踏的空間・時間・肉体を構築し、更なる可能性を探り、そして発展させることを目指している。」と言う通り、前回までは手探りな部分が多かったような気がした。だが、

今回の「部屋」は、今までの様式と異なっていた。目黒特有のウィットに富んだ演出が随所に存していたが、力を込めるところや、興奮を誘うところを極力排除していた。元々、そういった傾向はあったのだが、今までより濃く打ち出していたのが光った。

さて当の私に返ると、「部屋」という題名・作品が妙な引っかけを誘発し、私の背をむずむずさせた。居ても立ててもいられず辞書を調べると、面白い発見があった。

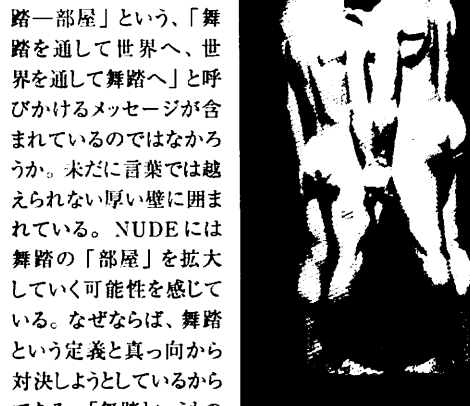
「部屋—1. 家の中をいくつか仕切ったそれぞれの空間。座敷。室。間(ま)。(小学館・大辞泉より)」これを「人間をいくつか仕切ったそれぞれの類。ヒト。哺乳類。人間。生物。」と言い換えてみると、さっきまでの背のむずむずがおさまリ、小刻みに表皮が震えるのを感じた。

私も外側へと出て行ったつもりが、未だに舞踏の部屋に閉じこもっている、またはヒトという類に閉じこもっているのではないかと暗示させられたのだ。元藤は晩年「世界中が私の劇場だ！」と言っていた。その言葉通り、舞踏は閉じられた劇場の中だけに存在するのではない。では、その先に広がっている「世界」とは…。NUDEをはじめ、元藤の門下生たちはその可能性を探ろうと、いま試行錯誤を重ねている。

最近になって、荒川修作氏が有機体一人間く建築的身体>の部屋(三鷹天命反転住宅³⁾)を完成させたという知らせを聞いた。科学、芸術、哲学といった枠組みを越えて身体を捉え直し、生そのものを変革しようとする荒川氏の思想と試み…ここには舞踏が世界とつながるための一つの大きな可能性があるように思え、私は武者震いを覚えた。そして今、私はそこから何かをつくり出している。

「舞踏はダンスの枠を越えて、どこかに降り立とうとし、未だにそれが降り場を見出せないで部屋にいる。やられたことはいくらでもある。観られたカラダはいくらでもあるが、そのどれにも引っかけを見出せず部屋にいる。」

そう、もしかしたらNUDEの「部屋」の観覧後に残された背がむずむずするような感覚の根底には「舞



撮影/田中英世(2点とも)

踏路一部屋」という、「舞踏を通して世界へ、世界を通して舞踏へ」と呼びかけるメッセージが含まれているのではなからうか。未だに言葉では越えられない厚い壁に囲まれている。NUDEには舞踏の「部屋」を拡大していく可能性を感じている。なぜならば、舞踏という定義と真っ向から対決しようとしているからである。「舞踏というものがある」と思っていない、むしろ「舞踏」を否定しようとしているからである。否定がないものに、発展はないことはもう分かりきったことではないのだろうか。舞踏を発展せしめようとしているNUDEは他の舞踏家とは一線を画している存在だと言える。実力や実績は全く興味が無い。絶えず変化(へんげ)を繰り返す、新鮮な偶発性の変化(へんげ)に自身が驚嘆する。

さて、窮屈な部屋の中で独り言をやめて、もうそろそろ本当の外へと出てもう良い時期かもしれない。窓越しから見える景色を背に、ドアノブを掴んで外へ、いや、ドアはもう腐っている！くだらないね、そして大好きだ！ (飯田晃一/芸術身体研究所)

* 1…元藤燐子(1928～2003)/舞踏家。1950年に「アスベスト館」を設立。夫である土方巽とともに「舞踏」の基礎を築き上げ、生涯その可能性を追究し続けた。自ら踊り手として作品を発表することとまらず、ワークショップを通して個性的な人材を世に送り出すなど、後の世代にも大きな影響を与えた。

* 2…芸術身体研究所の活動については<http://ab-labo.com/>参照。

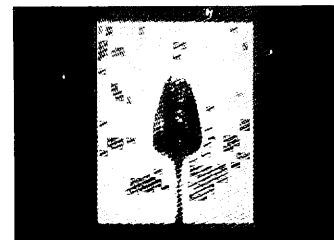
* 3…荒川氏の諸プロジェクトについては以下参照。
<http://www.architectural-body.com/>

●NUDE…04年、目黒大路を中心に結成された舞踏カンパニー。今一度舞踏の特性について考え、舞踏的空間・時間・肉体を構築し、更なる可能性を探り、そして発展させることを目指している。次回公演は未定。

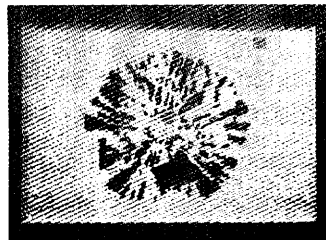
INTOWN

作家と作品

●4月某日、六本木の金鳳堂画廊へ。ここは六本木の交差点すぐ、1階は眼鏡店という不思議なつくり。ガラス張りの画廊は、明るい陽射しが差し込む。その光に向かって、吉光たけひろの描いた、花は開いていた。切り絵?と顔を近づけると、二層になった画面は、花びらは細やかに一枚一枚切り抜かれた上の層と、その切り抜かれた下の層は赤く色づけされている。立体的に見える花だけでなく、和紙のような紙に描かれた花、紙を違えて描かれた同じ花、咲いている花が生きて見える。奥の部屋にはまだつぼみの花が並ぶ。古賀隆義の水彩画だ。吉光の赤い花に対して、古賀は青い花。額の装丁もきちんとしているせいか、静かに花開くのを待っているようだ。大きな額にハガキサイズくらいのつぼみ、そのバランスは花畑でぱっと咲く初々しささえ思い出させる。春の暖かな季節を平面作品で感じることが出来た。(藤田千彩)



左) 古賀隆義作品



右) 吉光たけひろ作品

●「ばたた ことと さーさー」[はいた ひいて まいて]「くー うー る」…等々、擬音語のような、それでいて少し意味ありげな奇妙な言葉が並んでいる。大塚 out-lounge で行われた芳賀徹展は、珍しい音響詩の作品を集めた展覧会。言葉の意味というよりは音の面白さに注目した表現で、実際書かれた作品を朗読するパフォーマンスも会期中に行われたようだ。その様子は残念ながら聞くことは出来なかったが、「見る」作品も色々工夫されていて面白い。特に言葉が書かれた透明なアクリル板を重ねた作品は、透けて重なりあった文字が同時に発音されているようで興味深い手法だと感じた。これまでに詩の世界では音響詩、あるいは視覚詩(ビジュアル・ポエトリー)、具体詩(コンクリート・ポエトリー)などのさまざまな実験があり、美術の世界からも言葉への興味深いアプローチは何度も行われてきた。表現の洗練度でいえば、芳賀の作品はそれらの成果に比べると素朴なものに見えてしま

まう…が、会場で圧倒されるのはその作品の量である。床には詩がプリントアウトされた紙がばらまかれ、ファイルにも大量の作品があった。しかも前衛的な表現に情熱的に取り組んでいる、という印象は作品には無く、むしろ淡々と日々書き連ねたかのような雰囲気

が作品に漂っているのがとても不思議だ。詩という形式に実験的に取り組んだ、というよりもごくごく自然とその表現にたどり着いた…という風なのだ。作家の芳賀は現在は福島県に住み、東京に出て来て個展等を行うのは非常にまれだという。あまり話すことは出来なかったが、自分で漉いた紙で出来た名刺を貰った。作品自体も不思議であったが、作家自身の性格や暮らし、あるいは作家と作品の関係性にも興味を惹かれた展示だった。(小笠原幸介)



芳賀 徹展 左) 作品 右) 会場風景

飾り気のない芝居の中に光るわざ。 鳳劇団は会話劇の「良心」か？



アジア各都市をネットワークで繋ぐ新宿の小劇場
TINY ALICE より最新ニュース

鳳劇団「忘れな草をあなたに」
5月18日～19日
◎新宿タイニアリス

会場に入るとなんと能天気な昭和歌謡が流れている。その雰囲気と以前の作品「昭和元禄桃尻姉妹」の評判から、ドタバタ喜劇のようなものを勝手にイメージしてしまっていたのだったが、実際観てみると全然違う印象だ。もちろんドタバタも笑いの要素も芝居の中にはある。しかし意識してコテコテの笑いを狙っている訳でも、客に媚びているような態度も一切なく、俳優達の立ち振る舞いも含めて、なんというかと品のある舞台なのだ。

芝居はごくストレートな3人芝居だ。原稿用紙に向かい小説を書くようにしている初老の男。その物語はある突然の雨の日、男が自分の傘を貸してあげた若く美しい女の話。それが自分が実際体験した記憶なのか、空想の世界の物語なのか分からないまま男は「幻の女」の影を追いながら妻との生活を送る。妻には夫が痴ほうでボケてしまったとしか思えない。幻の美女を演じていた女優は一転ハイテンションな看護婦に変身、治療と称して男と噛み合えないトークを繰り返す…。飾りつけのない芝居。私自身はあまりこのような芝居らしいお芝居、というのを普段あまり観ないのだが、このある意味地味ともいえる会話劇の「普通さ」に逆に惹きつけられてしまった。でも、そ

の普通さの中にさりげなく演出は利いている。特に病院でのドタバタ治療を終え、夫婦二人での会話シーン。妻が昔行った旅行の思い出を懐かしそうに語り出す。しかし、最後に男がそれまでのなごやかな雰囲気を一変させる一言を妻に語る。「どちら様でしたか?」。この一言で芝居は終わるのだが、この一言の切れ味はすごいと思った。楽しい芝居だと思っていたら突然、これは怖い話になった。何か大仕掛けの装置があるわけでもない、ドラマチックな展開があるわけではないのだが、このたった一言の台詞がこれだけ力を発揮するとは、非常に驚きだった。恐らくこれは会話劇というものが持っている、大きな魅力のひとつなのだろう。会話劇にあまり馴染みの無い私にもそれは伝わって来た。

また、全体を通じて感覚全体に訴えかける工夫がしてあったのも演出の一つの特色かもしれない。例えば男がふかすパイプ煙草の匂いが会場を包み込む。男が一人でパイプをふかしながら原稿を書くシーンはかなり意図的に長くしてあったのではないかと思う。匂いで言うなら、「夏」を感じさせる蚊取り線香の匂いもずいぶん使われていたようだ。匂いだけでなく味覚でいうと、男がそうめんを食べるシーンも印象的だ。妻と会話しながら何度もそうめんをすすめるのだが、その音と相まってなんだか非常にそうめんが食べたくなって…。看護婦のスカートが短かすぎてパンツが丸見えなのも、そんな演出のひとつなのかもしれない

い(?)。
一見何の変哲も無い舞台だからこそ会話劇の本質が出ているような気がする。無論、何度も申し上げるように私は会話劇の本質など語ることは出来ないのだが…。そんな気にさせる舞台だった。

(小笠原幸介/本紙)

●鳳劇団…1980年に作・演出の鳳いく太を中心に結成された「游劇社」の新たな展開として2004年から活動を始める。2人または3人などの少人数の芝居で映画やテレビとは異なる「舞台」の面白さを追究すべく活動中。「忘れな草…」は「昭和元禄桃尻姉妹」と共にレパートリー作品として今後上演を重ねて行く予定でもある。

●劇団ホームページ…

<http://www.geocities.jp/ohtorigekidan>

女優のしるさ娘。今回は和服姿の幼い美女と超ミニのハイテンションな看護婦を二役で熱演。



ダイナミックなダンスと劇中劇。 女性中心のユニークな劇団が描く「男と女」。

Miss PRs「デリカシー」

6/2(金)&6/3(土) 19:30 6/4(日) 14:00

前売¥2800 当日¥3200 問=03-3975-4611(劇団事務所)

作・演出=斉藤尚子 監修=小塚和浩 振付=chaco 出演=篠田亜矢子 沢田珠美 成田真貴 星野良太 斉藤尚子 奥山健二他

★妖怪ちっとは人間のリュウに恋をした。「僕は君が嫌いだ。君にはデリカシーがないから」そしてちっとはデリカシーを探す旅に出る…そこで待ちうけていたものとは?

Q—Miss PRsは、女性中心で構成された演劇集団ということですが、そのあたりは劇団としてのコンセプトも含めて、意図的なものなのでしょうか。

A—はい。女性ならではの視点で、女性だからこそ描けるというものに挑戦しています

Q—それはちょっと怖いんですね。

A—男性の観客からよく怖いと言われるのですが、怖い物語を書いているつもりはないんです…。(笑)

Q—女性的という、(一般概念としては)環境やシチュエーション中心というよりも、登場人物の内面にポイントが置かれていると思うのですが、いかがでしょう。

A—柔らかな視線で観てもらえたらと思います。現代社会において、20代後半から30代の女性って、

とてもフクザツな心境を抱えていると思うんですね、私を含めて。世間では結構大人だと思われがちですが、分からない事が沢山ある。例えば、社会性と母性のバランスとか、何が良くて、何がダメで、それは誰が決めるのかといった価値観の問題。謎を解く鍵は、自分の内面だけではなく、他人の内面に興味を持つ事ではないでしょうか。例え正解にたどり着かなくても。そういう行為を象徴的に舞台化しています。

Q—象徴という意味では、ダンスというものが大きなウエイトを持って挿入されていますが、ダイナミックな群舞はMiss PRsの特徴の一つにもなっていますね。

A—「ここを強く伝えたい!」と思う部分を言葉で説明するのではなく、敢えて肉体だけで伝えたい。動きだけで表現することによって、そのシーンでのテーマや出来事を抽象的に簡略化出来るし、観客にもより多く自由に想像してもらえんじゃないかと思うんです。

Q—過去の作品では、現実の人間たちが内面から浸食されて本質があらわになるものが多かったようですが、今回はどうなんですか。

A—テーマは、ずばり「愛」「男と女」。現実的な関係を、劇中ではディフォルメされた姿で描きます。メルヘンの皮をかぶった劇中劇です。二つの世界がクロッシングして行くのかインポーズして行くのかは

新しい演劇を発信する神楽坂と麻布の小劇場 DIE PRATZE より最新ニュース

観てもらえば分かると思いますが、観る側の立場や視点で、色々な結論に行き着くんじゃないかな。でも、きっとこの非現実的な感覚は共感してもらえと思っています。

Q—切り口は一つではないと。

A—ええ。内的世界と外的世界の境界は、実はすごく曖昧なんじゃないでしょうか。それに、人が他人に見せている部分なんてほんのわずか。何が正しくて真実なのかは、視点や立場が変わっただけで逆転したりするんじゃないでしょうか。

Q—そのあたりは、観客が判断できると。

A—はい。投げっぱなしではないので、模範解答はいくつかあるはずですが、どれが正解かは、見た人によって、それこそ男性と女性で変わってくると思います。できれば、多くの男性にも見ていただきたいですね。第一回公演のキャッチは「緩やかなる男子禁制」でしたが…。(笑)劇場でお待ちしています。

JOIN IN THE PICNIC 期待の公演情報

◆神楽坂die pratze
5/26(金)～5/28(日) オッセルズ
「編み上げブーツでハッシュドビーフ!」
問=090-9724-8326

E-mail occelus@hotmail.co.jp
◎オムニバス公演! ファッkingな日常にご不満なアナタへとおきの笑いを! パカさ100%のコント、映像、音楽で最高の週末をお届け致します。

◆麻布die pratze
5/26(金)～5/29(月)

Ump Temp
「<茜色の詩想劇> アンチンキヨヒメ
—求めむと思し願ひて—」
問=090-9321-4162(Ump Temp制作部)
◎時の交錯する魔城のような洋館で、雨の中、女は鐘突堂の屋根の下で佇む男を見た…。安珍清經伝をベースに紡ぎ出す、生演奏と映像が織り成す茜色の詩想劇第二弾!



